第３章

研究報告会：「学生参画型授業―理論と実践―」

学生参画授業の理論と実践

林　義樹（武蔵大学教授）

1. はじめに―20年追求してきたもの

私はもう20年ぐらい、学生が自ら授業を企画運営し、先生はそれをサポートするという考え方で授業をつくるにはどうしたらいいか、また、この方式にはどんな教育的な効果があるか、どんな教育的な意味があるかということ等を実践的に研究開発してきました。本日は、それをご報告したいと思っています。

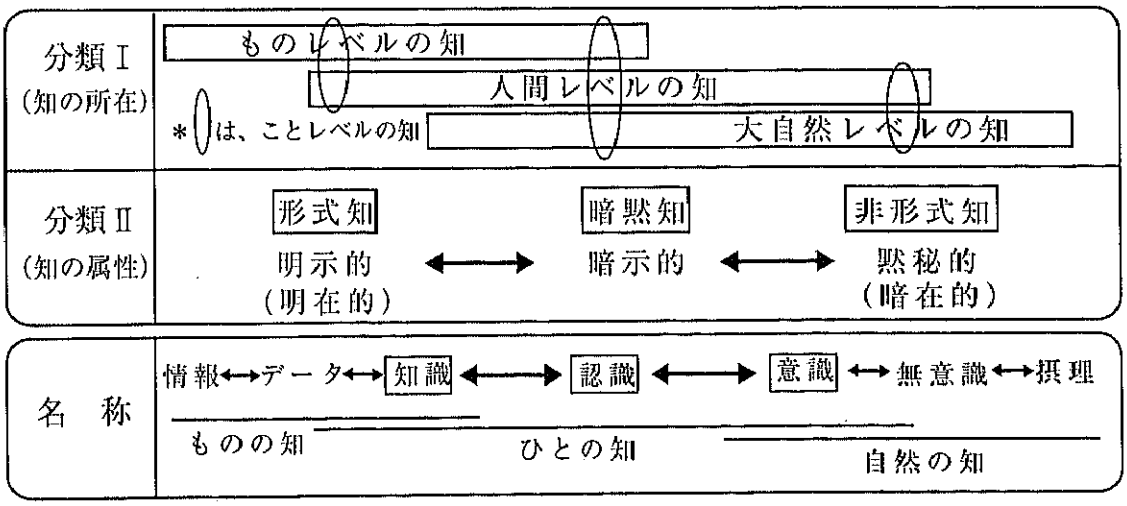
> 尚、講演ではA4判32頁のテキスト、及び実例資料集を用いましたが、本稿では、紙幅の都合で、テキストの方はピックアップして掲載し、本稿だけ読めば、理解できるよう再編集を行いました。実例資料集はほぼ掲載してあります。また、授業風景のビデオを用いましたのでその個所は明示しました。

2. 参画授業の理論

◆知の分類と学び

私は、学生参画授業の研究開発一筋で参りましたが、最近は、知の問題に、大変関心を持っております。知というか、ノレッジということと、「参画する」ということが、どんな関係があるかは後からお話いたしますが、図1の右側に位置する知を問題にする時、初めて学習者が「参画する」ことの意義や意味が見えてくることがポイントです。左側だけを問題にするのであれば、むしろ参画は無駄なもの不要なものなのです。

いずれにせよ、「知」の本質的存在形態と参画の問題は深い関係にあることは、頭に入れておいてください。



（2001.7.15.林　6.9.を改訂）

図1　「知」の分類表（知の本質的存在形態）

◈参画とは何か

まず参画という言葉の定義をはっきりしておきたいと思います。参画授業とは何かも、これに尽きると言ってもいいくらいです。参画の辞書的な意味は、書いて字のとおりで、「計画に加わる」と広辞苑に載っています。「男女共同参画社会」という用い方が大変ポピュラーになってきましたけれども、これは、女性が政策の計画段階（特に意思決定）に平等に加わるというふうな意味です。ただ、私が参画授業を実践してみて、最初の意思決定とか計画に加わるだけじゃなくて、実行したり、あるいはそれを評価したり、それからもっと、評価した後それを他人に伝えたりというような、むしろ後半部分のほうが教育的には大変意味があると思っています。

◈参加の3段階理論

「参加の3段階」という表1が、実は私の参画の考え方のミソになっています。

基本の考え方は、参加を3つの段階ぐらいに分けて考えると参画が大変位置づきやすいということです。だから、「参加の姿勢」とか「参加の態度」、すなわち、かかわり方の違いとして参画を位置づけているわけです。第1段階を「参集」、第2段階を「参与」、第3段階を「参画」と言います。この言葉自体はこだわらなくてもいいのですけれども、そこにいあわすだけの参加の姿勢から、そこでのできごとにかかわっていく参加の姿勢、そしてその場をになう参加の姿勢という3つぐらいの参加の姿勢の違いとして説明できます。

段　階	コンセプト	キーワード	参加の姿勢	参加の局面	情報の流れ	行動のレベル	知の深度	理解の程度
第1段階	参　集 Attendance	いあわす	受動的	局所状況	一方向	個人的	知識	断片的
第2段階	参　与 Collaboration	かかわる	能動的	小状況	双方向	集団的	認識	部分的
第3段階	参　画 Commitment	にないあう	創造的	全体状況	多方向	組織的	意識	包括的

（『参画理論と情報システム』 p.62, 1996, 林　を改訂　2001）

表1　参加の3段階（参加者のかかわり方の変化に注目して）

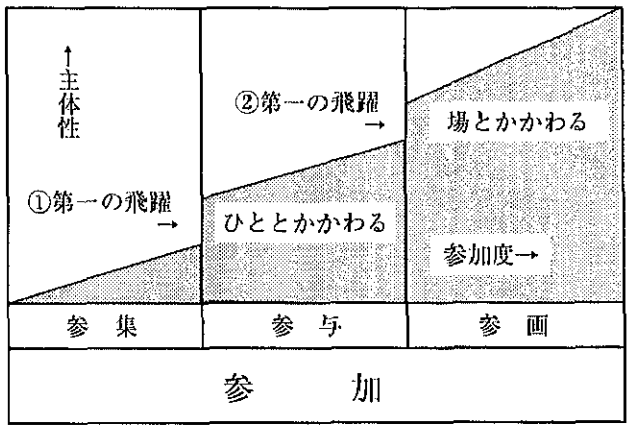
この3つの段階というのは、教室だけではなくて、キャンパス全体にどうかかわるかとか、お仕事にどうかかわるかとか、自分の家庭にどうかかわるかとか、地域にどうかかわるかというような形で、どこにでも当てはまりますので、一般理論みたいなものも実は工夫して造り出していまして「一般参画理論」と呼んでいます。最近はやっと教育のほうでも関心がだんだん高まってきているんですけれども、むしろ企業とかまちづくりとか、あるいは看護の世界とか医療とか、そういうところへ行って参画の話をいろいろしています。

ポイントはその表1の右の欄にあります、かかわり方の違いによって頭の働きが違うというところです。活動によって獲得する知というんでしょうか、それがどうも違うというところがミソなんです。要するに、体はここに来ているけれども、ここで頭が働いているかどうか、さらにここで心がこもっているかみたいなことが大変重要になってくるということです。

◆授業への学生のコミットメント

この表で、Attendance、Collaboration、Commitmentと充てていますが、これは外国のものを輸入したんじゃなくて、逆に、日本語に対応して私が逆に訳してみたもので、「参画」には“Commitment”を当ててみました。「責任を持ってかかわる」ということです。「学ぶ」ということに対して責任を持って学習者自身がそれにかかわるということを、授業の中で、推し進めていったらどうなるかという授業なんです。今までは先生が全部責任を持ってやっていくことになっていましたが、どうも無責任や不都合が生じてきているので、「もうちょっと、先生、授業に責任持ってよ」という話がFDの主流なんだと思う。ですけれども、私は、並行して学生も学生なりに自分の学びなんだからちゃんと責任を持ってやってもらって、教職員は、そのサポートをちゃんとやるという考えです。学生側にそういう力量を、学ぶ力として形成しようというわけです。

◆参画への3段階のイメージ



【ひととかかわる】という飛躍

① その場にいあわせた他者とかかわる

・勇気を出して

・めんどくさがらず

・気楽に

【場とかかわる】という飛躍

② その場そのものをにないあう

図2　参画のイメージ 参加の3段階モデル　(1989.林)

＜林義樹「参画理論と情報システム」武蔵大学総合研究所紀要 No. 6 より＞

もう一度この参画をイメージでおさらいをやりますと、上にあります図2のように「参加」というのを「参集」「参与」「参画」と、3つの段階にわける。まず最初の「参加」の段階の、参集している者にも予習、復習する者もいるし、しない者もいる。第2の段階は人とかかわるということです。授業でも、予習、復習するけど隣の席にいる者と全然話をしない、かかわろうとしない、先生ともかかわろうとしないという者もいる。決してそれはいけないわけじゃないんだけれども、別のかかわり方がある。それが参与です。こうして、他者とのコミュニケーションも出てくる段階へ進みます。ここで、いろいろかかわるようになってくるけれども、第2の段階が、「参画」へいくところ、ここが今日の話の1つのミソなんです。それは何かといいますと、これを探すのに10年ぐらいかかったんですけれども、それは「場づくりにかかわる」ということです。学ぶための場を造ることにかかわる。人にかかわるだけじゃなくてその場の形成にかかわる。この場にかかわるというのは、例えば今日のこの研究会を考えますと、事前にある程度企画がなされて、それをもとにいろいろ先生が話しあわれ、もちろん事務方とも十分話されて、そして今日ここにこの90分のために先生方も万障繰り合わせて来てはじめて成立する。人々が、この場がうまくいくようにいろんな形でかかわってきている。このように「場づくりにかかわる」ということが大事で、参画するということをひとことで言えば、場を造っていく、「場づくりに加わる」ということだというふうに今のところ定義しています。そのことはいろんな“場所”について言えることだと思っています。

◆参画の自動詞的定義

下記のように定義をしているんですけれども、当事者が加わる、当事者が参画するということが大事なんです。だれでもが加わるという、そういう今までかかわれなかった人がかかわるという意味の参画は結構はやってきていて、今社会が、オープンになってきている状況の中でそれは悪いことじゃないんですけれども、中心になるべき人である当事者がかかわるということが大事なんです。授業でも先生と学習者がかかわるということが大事です。先生はもともとかかわってきたんで、学習の当の本人である学習者がかかわるというところにミソがあるわけです。男女共同参画社会論でも、社会に男性だけじゃなくて女性もかかわるというわけです。

この次は、障害者の参画の問題、高齢者の参画の問題、そして子供の参画の問題へと発展していくでしょう。当然、当事者なのだけれども、その人たちが人任せでお客さんになっちゃった。私の参画理論は、そういうことをどうやって取り戻すかという話です。

その場の当事者が関係者と全体像を共有しながら、自発的、自省的に計画段階から実施・評価・伝承の段階に至るまで、『場づくり』そのものにかかわり、自らその部分をにない、主体的、創造的、開放的・全一的に参加すること

①（広義の）参画にも、

（イ）既に場がある時の参画【既存場（きぞんば）参画】と、
（ロ）新しくこれから場を創る時の参画【創設場（そうせつば）参画】がある。

②今の日本では既存場が死にかけていることが多いので、（ロ）のつもりで（イ）に取り組む必要がある。

（林義樹『参画理論と情報システム』武蔵大学総合研究所紀要　No.6. 1996 を改訂第10版）

林の参画の定義（自動詞的定義）；「参画する」とは

今、事務の方がうなずいておられましたけれども、要するにこのキャンパスをどうするかというと、「これは私のキャンパスだ」と構成員にどうやって思わせるかということだと思うんです。学科は学科で、どうすれば「これは、私の学科なのだ」と意識づけられるかだと思うんです。この“思い（参画意識）”をどうやって造っていくかということを“授業と切り離さないで、授業でそれができる”というふうに私は考えています。そこを離れないように、つなげて考えていこうということです。

定義では既存場参画と創設場参画の区別の重要性にも触れていますが割愛しておきます。

◆学びの第1モード―参集型の学び―

参集、参与、参画という3つのモードで学びも3つぐらいにかなりスパッと分かれる。表2を見てください。1つは参集型のモードで、これはいわゆる先生がレクチャーをやるという形で、学習者はそこへ出席してちゃんと聞くというモードで、うまい講義というのはこれなんですね。これはこれで意味がありますし、ちゃんとやらないといけないんですけれども、私はこれは近い将来、ビデオとかインターネットのHPにどんどんなっていくだろうと思います。いろいろな難しい話でも、ビデオにちゃんと入れてあれば

モード			第1モード	第2モード	第3モード
学びの型			参集型の学び	参与型の学び	参集型の学び
学びの主体	学習者	役割	視聴者	出演者	設営者
		行動	出席・視聴・記録	発信・交流・生産	企画・実行・伝承
		獲得	知識まで	認識まで	意識まで
	教師	役割	レクチャラー	コーディネーター	スーパーバイザー
		行動	教える	調整する	学び合う
		決定	独　断	相　談	協　議

表2　学習者参加型の学びの3モード　　(1990.林)

寝ころがって何回も聞けばいいわけですし、関係ないところは聞き飛ばして必要なところだけを納得できるまで聞く。そして必要なところだけさらにインターネットで聞く。第1のモードはそういう形にどんどんなっていくんじゃないかなと思います。

だから1つの提案は、まず、第1のモードの学びはどんどんそういう形にされたほうがいいと思います。放送大学はそれをやっているわけです。大きな大学にはそれぞれの分野のタレントがいるわけだから、真正面から、こういう世界を独創的に切り開いていくということが大事なんじゃないでしょうか。これからはそれが大学の財産にもなります。

◆学びの第2モード―参与型の学び―

第1モードばかりではいけないわけで、最近参加型という呼び方で第2のモードがはやってきているといいましょうか、大学の先生方もFDで学生をどう活動させるかという工夫をしておられますが、これは第2の段階です。学生はそこへ来て発信し、交流し、生産するという形で生き生きとして楽しくやっている。だけど、これにも限界があると思っています。なぜなら、このモードはあくまでも先生や助手がつくり出している場の上で活動しているわけですから、言ってしまえば第1のモードよりももっとたちの悪い受け身になってしまう可能性があるわけです。「先生の授業はおもしろくない」とか「もっと活動させてよ」とかいうような形になってしまう恐れがある。

◆学びの第3モード―参画型の学び―

学習者自身がそういう学ぶ場をつくり出していく。第2の段階で先生がつくってくれた活動の場を、今度は自分たちでつくり出していく力がつくようにしていく、そういう見通しを持って、第2モードを用意することが重要じゃないかというのが私の考えです。何もかもこの参画型にしなさいという意味じゃなくて、ちょうどいいバランスを探す必要があります。今余りにも第3モードがない。この第3モードをやることによって第1モードや第2モードが復活してくる。参画授業論とは、そういう話です。

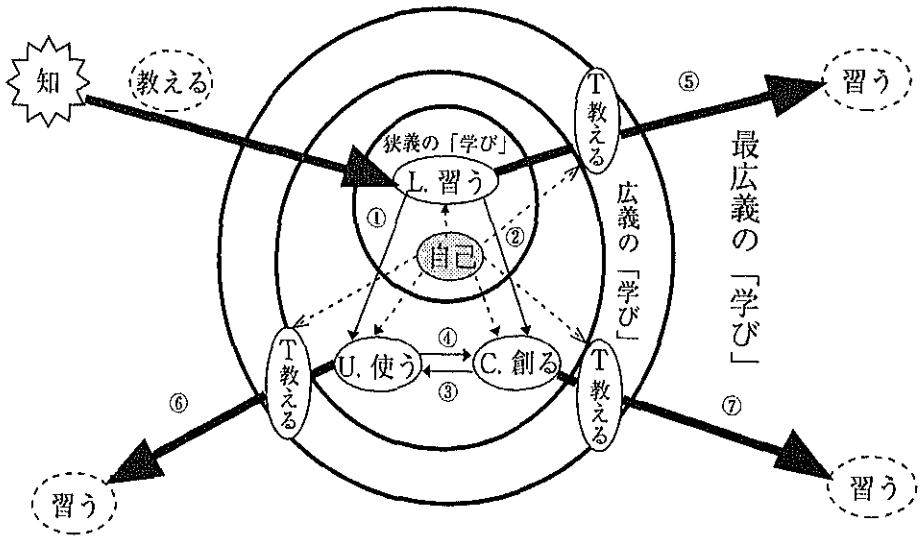
ですから、これからお見せする参画授業は、どの授業もこんなふうにしろというわけじゃなくて、1週間に1回ぐらいとか、あるいは大学に入ったらまずこれをやって切りかえていくというようなことをやれば、先生方が授業をつくるのがいかに大変か、授業が受けられるとはどんなにありがたいことかということがわかってくると思うんです。それがわからないままの学生に、「いいか悪いか丸つけなさい」みたいな話にすると、これはお互い余りおもしろい話にはならないんじゃないかと思っています。

◆知識循環型社会のための「知」と学びの多様性

参画が何にかかわっているかというと、知性、とりわけ「どのような知を得るか」ということと大変かかわっているということです。ポイントだけ話しますと、図3のように、①知を受容するための知とか、②知を形成するための知とか、③知を活用するための知とか、④知を教えるための知とか、それらは性格や機能が違う。今までは第1のタイプだけでよかったんですけれども、これからは、第2のタイプのコンセプトをつくるとか、第3のタイプのコンセプトにとらわれないで実行するとか、そういうことが大切になってきているわけですから、それらの知に対応した学び方が必要だということです。

これらの「知」をバランスよく発展させて初めて、知が他者とのかかわりを産んでいく。図3のように、今までの個人で習う (L) ということを中心にした知は、行き止まり状態というんでしょうか、習ったことを、ずっと使わない状態で、試験が終わったら終わりにしてしまう。大変不健全な状態になっていて、学ぶ意味がわからなくなってしまっているという状態だと思う。大切なことは、自分で習った知をもとにして創り出す (C) とか、あるいは使う (U) とか、教える (T) とか、知を発展・展開させることです。

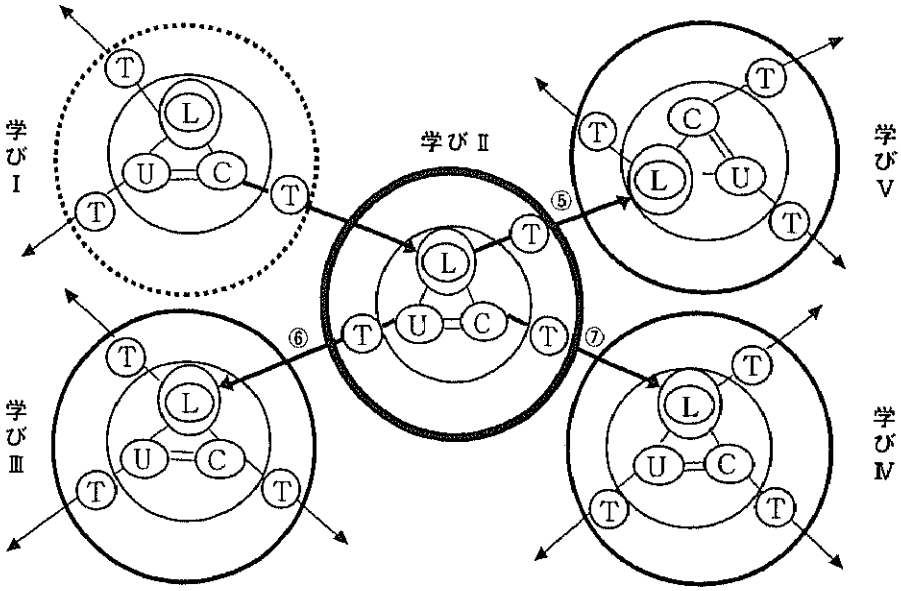
私が特に強調したいのは、学んだことを使ってみてそのエッセンスを人に教えることです。例えば小学校の上級生が、下級生に教えるとか、高校生が中学生に教えるとか、大学生が高校生に教えるとか、そういうことがこれから大変重要になってくる。この「教える」ということを今まで、教師が独占し過ぎた。教える楽しみの教師による独占ですね。だからもっと学習者にその喜びとノーハウを分け与えるといいましょうか、そんなふうに考えていただければよいと思います。このように「知」が、姿を変えながら、価値を生み出しながら、伝播していく。こんなイメージの社会を、私は、『知識循環型社会』と呼んでいます。この共同作業に、人びとが参画していく。これが参画社会の全体像です。図4は、様々な学びが、知を媒介してくモデルです。



*L, U, C, T は学びの4機能；①～②は学びの機能変更
(林の「学びミクロモデル」愛称「学びの三重円モデル」；2001.7.14)

→ ：コントロール
→ ：学び機能の移相
➡ ：学びを結ぶ機能

図3　学びの4機能とその連鎖反応過程　―知的活動への参画による社会的エネルギーの発生―
(狭義・広義・最広義の学びの3重円モデル ―「学ぶ」ことと「教える」ことの統合)



（林の「学びマクロモデル」　2001.7.20）

図4　人の学びの連鎖反応モデル（知の連鎖反応モデル）

◆『場づくり教育』の原理

参画というのは場づくりに参加することだと言いましたけれども、その場とはどうやって形成されるかということを考えてみましょう。

結論から申しますと、それは内容をつくり出すということとそのための形式をつくり出すということです。きょうのこの研究会で考えてみますと、場をつくるためには、会場を設定して、タイムリーないいテーマと最適の人を呼んで、その講師が約1時間の中にコンパクトに内容を入れるということをやらないといけない。さらに、本当にこの場が創造的内容であったかどうかというのは、この後ディスカッションから講師の話よりさらにいいものが出てくるかどうかが一番本命ですね。そういう内容をつくり出していくということと形式をつくり出していくことの両方向からの場づくりというのが必要です。ですから参画力というのは、実は“場の内容形成力”と“場の形式形成力”の両方が相まって力量として形成されてくるだろうと思っています。

◆参画教育の方法の原理

参画教育のつくり出し方の大筋が図5です。まず、参画状態をつくるためには、参加者の全員が当事者個人として躍り出てくるというんでしょうか、自分というものを打出してくる必要があります。結局、多人数授業が1つの授業として成り立たないのは、学習者一人ひとりの自分というものが出てないためなんですね。参画授業は100人でも、200人でもできるわけで、そこに一人ひとりがちゃんと出てきて、だれだれさんということが認識できるような状態になってくると参画状態はできるんで、人数の問題じゃないんです。もちろん、500人～1000人となると回数や会場の条件にもよります。10人でもたとえ5人でも黙ってれば参画状態は生まれないんです。ここで作用している力を私は人格力と呼んでいます。

次は、組織力といいましょうか、人間にとっては、やっぱり小グループがまず大事だろうと思います。次はクラスとかインター・クラスなどの組織です。組織力と呼んでいます。日本では、この方面の教育がずいぶん遅れています。それらができてくると第3の段階としては、現実の生の情報というか、事実に直面させるという場面がどうしても必要だと思うんです。理科系の場合にもあてはまると思うのですが、動

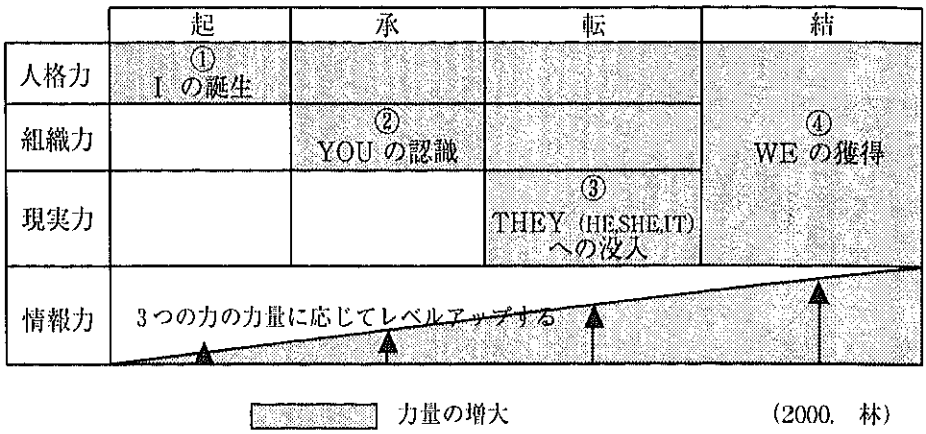


図5　参画の4つのエンジンと学びの展開のストーリーの原型

かしがたい事実に直面させるということが、本気になっていく、ほってはおけない、自分のこととして参画させるための大変重要な局面だろうと思います。それによって初めて「私たち」という意識が生まれてくるということです。これを、現実力と呼んでいます。

上の欄に「起承転結」と書いていますけれども、まず起で人格力をエンジンでＩが登場して、承で組織力をエンジンとしてYOUと出会って、転で現実力をエンジンとしてTHEYにかかわって、そこから結として、それらを総合してWEが獲得されていくという道筋を考えて育てていけば参画状態というものが大体できてきます。情報力エンジンは、それら3つのエンジンを総合的に活性化させるパソコンのOS（オペレイティングシステム）のようなもので、このシステムが実際的に使い物になるかどうかの決め手です。

◆参画の諸原理の本質

先ほども言いましたけれども、いわゆる言葉レベルの知識だけを問題にするのであれば参画ということはあまり問題にならないということが、参画をやってきてわかったんです。頭の中で知識がネットワークをつくっていく、認識を問題にするためには、その人が本当にかかわって他者と、ディスカッションしないと共通認識はできない。さらに単に、ディスカッションするだけじゃなくて、その場づくりを行うというところに初めて参画という問題が出てくる。いわゆる発信交流型でことばの上でうまいこと言っていても、お互いの意識の問題とかお互いの行いの問題とかにかかわりあわないと参画は浮かび上がってこない。参画の意味があまり見えてこないんです。図6がその関係を示しています。

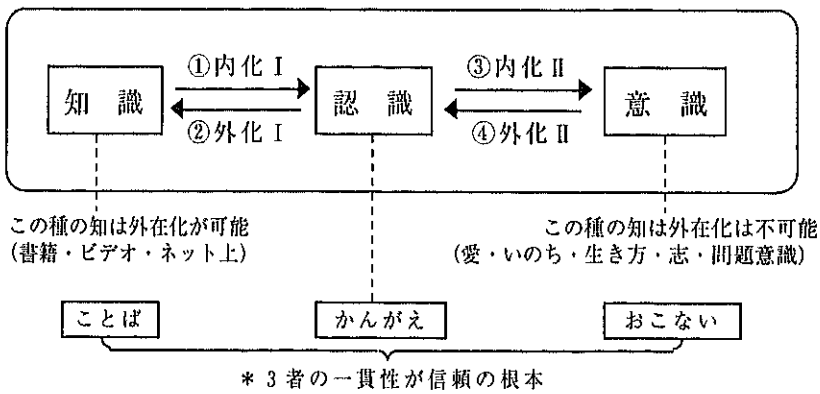
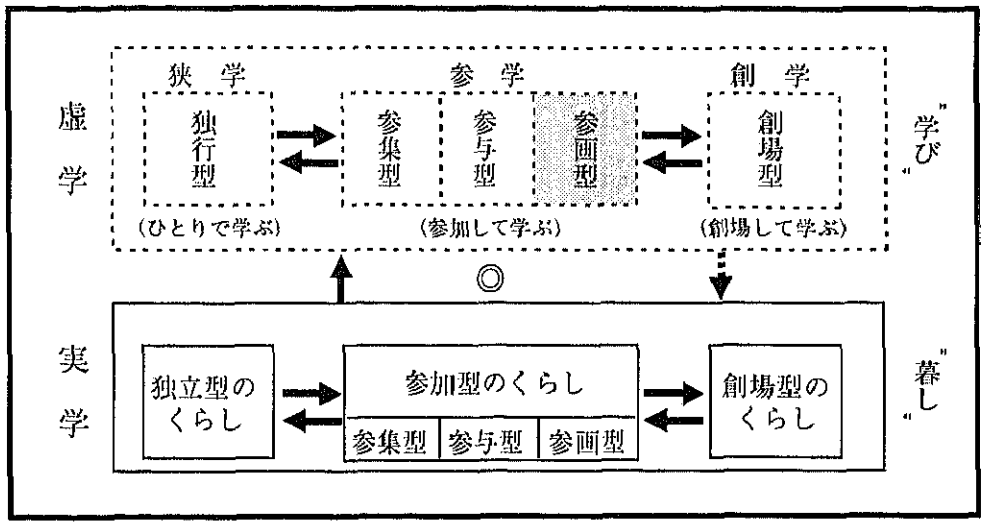


図6　「知」の内化と外化の相互浸透モデル

教育として、知識だけを教えようとか、認識ができればいいんだとか、いいレポートを書ければいいんだとかというふうに考えていたら参画というのはあまり浮かび上がらない。口で言ってもちゃんとできるか、やってるかというようなことを問題にし始めると参画ということが授業の中で出てまいります。実はそういうことを教師にできるかということなんですけれども、「教師という仕事」はひょっとしたらそこのところにかかわっていくようなことだったんじゃないかなと思います。

◆“学び”と“暮し”の生活の中での統一

最後は「参画」から見たら、これからの社会はどう見えるかという話になってきます。図7に、虚学と実学という学び方の視点から、「参画」というかかわり方を生活の全体象の中に位置づけてみました。



(2000.10.31.林)

図7　ひとの生活（“まなび”であり“くらし”）のトータルイメージ

図7の補足説明：参画（型）教育（参画学習）から生れる新しい学びと暮し

①生活における“くらし”と“まなび”の全一性（統一性）の回復を

(a) 広義と狭義の書き分け

・“まなび”・“くらし”は広義（生活の中では統一されている）

・“学び”“暮し”は狭義（人生や生活の局面で相対的に独立している）

(b) 暮しと自然

・暮しとは、生まれ育ち、働き、愛し、子を生み育て、親を看取り、老いて死んでいく「いのち」の一生

・暮しこそ、人の営みの本質

・ひとの暮しの背後に「自然」がある

(c) 虚学と実学

・“学び”は“なまび”を直接目的とする（目的としてのまなび）＝虚学

・“暮し”は“なまび”を直接目的としていない（結果としてのまなび）＝実学

(d) 自己

・スイッチングしている「自己（◎印）」は確かにある（いる）が、どこにあるか（どこにいるか）誰にも分からない。すなわち、「自己」はどこにもないとも言える。それが「いのち」なのかもしれない。

②「知」の自己運動の誘発を

(a) 横運動；「参画型の参学」が創学と独学を育み、虚学を確かにする

(b) 縦運動；「参画型の参学」が実学を育む

(c) 自己の中で学びの横運動・縦運動を統一する力が自覚される

(d) これらの運動を誘発するのが「参画型の参画」

まあ、こんな考え方でもう20年以上参画授業をやってきて、私だけではなくて私以外の人でも、大体安定的にこういう授業をつくり出すことができるように、システムが完成してきて、いくつかの大学でも結構実践されて効果を上げています。看護学校でも実践され、これも安定的普及ができるようになっています。

3. 参画授業の実践

◆本授業の特色と概観

次に事例を紹介したいと思います。皆さんに本日ご紹介するのは、『特別活動研究』という授業です。学校の教科以外の活動をどうやって教師は指導するのかということを学ぶ科目です。教職の必須で、半期2単位、90分15回です。1年生から4年生まで75人が履修しています。

まず、この授業開発の特色から説明します。資料集の資料1、「後期授業のすすめ方をめぐって」は私が授業の冒頭で、学生に説明する基本方針の図解です。特色は、この図解の真ん中に置いてありますB2。学び方のツールとしての「新聞」をうまく活用するということです。やっぱりコミュニティーには新聞が必要です。参画できるような組織をつくっていくためには新聞発行が不可欠です。それから次は、図の上にB1「ラベルワーク」と書いていますけれども、ラベルワークが大事です。文字型認識だけでなくてこういうビジュアルな認識方法は、情報量が10倍以上違うと思う。場合によっては100倍以上のこともあるでしょう。この図で示す内容を、文章であらわすと大変な量になる。こういう図にするとそれぞれの項目の位置づけもわかるし、微妙な関係もわかる。このようなビジュアル・コミュニケーション力を学習者も、私達、教師のほうも身につけないと参画型の学びは実現できにくいと思っています。

図の右下のE「後期の流れ」に書いていますけれども、大体、流れとしては、1～3回の最初は私が仕掛けていって、そういう発信、交流の状態をつくり出していきます。参与段階ですね。そのやり方をだんだんみんなが慣れ親しんで、少しずつ学習者に企画運営をバトンタッチしていって、今日ご紹介する7回ぐらいのときには75人ぐらいの自主運営の学習集団ができてくる。これから先はチームごとのフィールドワークにそれぞれ出かけて、12月15日に他の授業との合同発表会を行って、1月に最終授業をして終わりという、大体そういうふうな授業になっています。

◆1回～3回の授業運営―導入期―

第1回目の授業のときには、資料2のような新聞を私のほうから仕掛けて発行します。「特活 Beard」という新聞です。Beardというのはひげですけれども、今期は私がひげをはやしたので、こういう名前でつくっています。第1号に書いてあるのは、この授業の目的は何であるか。大学の2単位というのは90時間、教室と教室外で勉強しなければならないと法律に書いてある。先生も学生も全然この約束を守ってないのでこういう状態になっている。今後、日本の学生が大体守ってくれるようになったら、私はもう少しノルマを軽くするけど、まだだれもやらないのでこうやっているんだというふうに言って、それから入っています。

清水先生はその辺の単位の根本的な研究をなさっている。学習時間に、このような法的な根拠があるわけですから、これからまず入ります。

2回目にはどういうことをやるかといいますと、1回目の最後に「特別活動を研究するあなた自身の過去、未来、現在を図式化しなさい」という課題を出しているのです。「勉強しているあなた自身は、なぜここへ来て、今から何をしようとしているのか」というのを図解に書かせますと、ラベルワークを知っている知らないにほとんどかかわらず結構おもしろい図解をつくってきます。この図解を用いて話し合って

資料1

S ツールを実践的・参画的に開発しながら、学びの内実としての知のクオリティーが、より多様で、個性的になるように支援し合うためのクラスワークをめざす

① 2001.9.17（9.30.改訂）
② 林義樹
③ S-BS
④ 後期授業のすすめ方をめぐって
⑤ デジタル化：北崎恵理

A 林メディアの進

②参画活動シリーズの改訂

Beardを発行する
・各授業ごとに出す
・不定期だがなるべく出す
・内容、形式を一新する
・教材知を増やす
・B新聞的な要素を増す

＋

①林の授業新聞の刷新

解説シリーズは、タイトル、形式も変えて、ワード化する
A4×2セット
→B4 1枚でプリント
1種類にする

冊子化して保存

学生参画型で授業ツールの開発

学生にラベル使用を自由に開放

学生の新しい利用法を募る

開発者は評価対象

B1 ラベルワークをツールとして使いこなす

Lケーション

3枚複写Lの活用の開発→ミニ討論用

Lアレンジメント

図式化の研究開発を行う

フリーハンド図解

<F図解>を早く教える

ラベルワーク図解

<L図解>シールラベルの開拓

デジタル図解

<D図解>ISOP紹介する

B2 学びのツールとしての新聞

F 場づくり新聞

クラスの
フォーマル新聞
A公式（オフィシャル）
B新風
Cおちぼ拾い
D教室外
Fフィールドワーク
Lラベル

T チーム新聞

T新聞、保新聞
研究チーム

作者は提出物にできる

P 私の学び新聞

P新聞
・自己紹介
・問題意識
・研究計画
・ネタ新聞
・FW新聞
・まとめ新聞
・振り返り新聞

資料の柱に

個人ポートフォリオ作品化

①プリントの整理から

②報告書・プレゼン資料へ

常時活用

B3

教科書代りに林がプリントを早期から。学生が教材を図式化して投入

B 参画ツールを使いながらマスターする

D コミュニケーション手段（方法）の確立

①掲示板
・教職公式
・事務室＋ルーム内
・林研究室

②携帯メールどうする

③パソコンメールどうする

④林のHPをupして、そこに色々なものを載せる
① 新聞
② 解説
③ 伝言（掲示）

⑤＊有志で＊サブメジャーにできる（評価対象）

F 評価の多様化

・自己申告・サブメジャーシステムで実践研究・コース分け・評価検討委員会創設

半完成品で交流会

基本理論

三学理論：独学 P新聞が中心 ⇄ 参学 参集 参与 参画 ⇄ 創学 創学として 創学に向けて

四知理論：①学ぶ（Learn）→②創る（Create）→③使う（Use）→④教える（Teach）

C 新しいボランティアシステムの構築

①VW
大渡さんの役割（やってみたこと重視）

②SW
SWは承認制度に
↓
SWシステムを立ち上げる

③LA
ワーカーの他にLAを開始する
<授業ボランティア>LAは誰でもやれる

授業内LA
他授業LA

⑤SR
リサーチボランティア（FR）募集
一まず思いを話してもらう・・・
参画授業研究Tを立ち上げ呼びかける

保活動へ

報告書を出す

⑥DV
開発ボランティア（評価対象）

E 後期の流れ

①初期
プリント教材を配る
新聞類、解説類
教科基礎解説シリーズ
評価のためのアンケートを実施する（何度か）

10月
②G編成

11月
③中間1

④FW
↓
中間2

個人のポートフォリオ展示

テーマ研究のリサーチ報告書を出す

⑤
12/15（土）
合同発表会

⑥補講（1日か2日）
・前期と同様でまとめに使う
・完成したT同士で小発表会（相互）をする

⑦1月に最後のまとめ

特活 Beard 7
（補足なし）

発行日：2001.10.31.（水）
発行者：林義樹
Tel/Fax　03-5984-3838
hayashi@cc.musashi.ac.jp
発行協力：参画文化研究会
sankaku-bunka@hat.hi-ho.ne.jp
Tel/Fax 096-360-3579（北崎）

1.吉田かおるさんの尽力ですばらしいHPがスタートしました。

① 授業内、授業間のコミュニケーションツールに使いましょう。
② 心から誇りに思えるページにして、世界中で教育を教え合う学びの場にしよう。

2.11月7日の授業について

① 次回は、林が筑波大学教育計画室で、参画授業について講演のため休講。
② そのために、本日ビデオ録画（清本ら）する。録画協力できない人は、遠慮なく申し出る。
③ 7日は『休講』というより先生の講義はないが、自主的なグループワークは行う。場所・方法は次回企画者が考える。各チームのミーティング、FW などでも可。曜日と日時を振り替えてもよい。
④ 各チームごとに活動することになったら、活動の始めと終わりに感想ラベルを書いて提出（指定曜日までに活動したチームはポストへ）→『D新聞づくり』（教室外活動新聞）を作成する）→D新聞担当者（　　）

3.今後の公式新聞発行について

① D新聞をスタートする
② 12月15日もA, 先, 後を発行する。（部数：他コース分も合わせて120部程度）
③ 12月15日の発表会の先・後ラベルをもとに、補講日に発行する。
④ 補講日1月9日も発行する（試験日にも発行<最後のアナウンスタイムを前後に行う>）

4.今回の企画・進行（大野達太<社1>・金子聖<社1>）（協力企画係：田所・吉田）

これからの学生による企画・進行の第1号モデルになる優れた姿勢であった
- 先学企画係や先生のアドバイスの受け方がよい。
- 企画に細かな配慮がある。
- 自由度がある。
- 連絡先の明記など関係者とのコラボレイションが意識されている。

5.今日のひとこと；プレゼンの前に「自分の一番言いたいことは何か」そして「それには今ここで言うに値する内容か」と自問せよ

―ならば、各チームのプレゼンの見どころは？―
① 図解化がうまく取り入れられているかなど、資料にアピール（訴求力）があるか。
② 90秒で“内容”があることを伝えられるか。
③ 資料や口頭発表の“向こう側”にある“志”“思い”がじわっと伝わるか。
④ 他グループとの重複を回避するなど、先の発表、後の発表をうまく取り込めるか。（状況にピタリ納まったか）
　＊ 陰の声：林から高質のコメントが出たら、いいその作品やプレゼンは“すぐれもの”のことが多い。→“反面教師的作品”もある。作品をどう学びに役立てるかは、やはりコメンテーター（林）の力量→コメントは実は激励旗であり、大凶器である。

6.係活動の活性化のために

① 次回の授業の企画に向けて、毎回特別のシフトを心がけよう。
（何のための係活動か）
② そのために企画者は連携してもらいたい係に、事前連絡を取っておこう。

資料2

いるうちに、一体自分たちは何をしようとしているのかがだんだん話題になってきますので、そこへフォーカスをします。これが2回目の授業の中心になっています。

3回目への課題は、特別活動研究で学ばないといけない30項目ぐらいを、ある1冊の教科書からコピーしまして、それをみんなに1人1項目ずつ分担させまして、その要点を1枚のラベルに書きなさいと言って出させるんです。それを学生の代表が授業の始まる数日前までに集結して、それらのラベルを用いて図をつくり、これをプリントして全員に配布し、1人30秒ぐらいで全員にダーッと要点を話していきます。こうして特別活動の研究の全体像のマップを頭の中につくらせて、そういう中から自分のテーマをだんだん見つけさせていく方法でやっています。

この方法のほかにも、全員が教科書を購入して使うとか、参画型というのはいろんな方法があっていいと思うんです。いずれにしても、各自、または各チームの提出テーマは広い視野で、しかも教えないといけない、学ばないといけない範囲内で見つけていくというふうにしないといけないんで、今のような工夫でやっています。クラス全体としては、全領域をカバーしているという、分担関係が見えることがポイントです。

◆4回～7回の授業経過―チーム結成期―

4回目ぐらいになってきますと、そういう資料をまとめたりしている学生たちが、授業のチーム編成を自分たちでやろうという気にだんだんなってきます。それを徐々に彼らに任せていって、例えば「プリントを少し手伝ってくれないか」から始まって、「この学ぶ場をみんなでつくるためにはどうしたらいいか」みたいな話を持ちかけると、係が少しずつ立ち上がってきます。

まず、自分はどんなふうに学ぶかなどを図示した「私の特活学びプラン」というのをつくらせます。資料1の中央下にある基本理論の3番に示してあるように、独学的に自分で学ぶのは何か、みんなと一緒になって学ぶ「参学」するのは何か、新しく学びの場をつくっていく「創学」するのは何かというような3本柱です。これも図解にあらわさせます。これらの図解化は特殊な難しいことではなくて、このサンプルを1つ見ただけでもパッとひらめいて、彼らなりにいろいろと工夫してやります。

もうこれで4回ぐらいきているんですけれども、チーム編成のためにいよいよみんなの心の中に旗が立ってきますので、みんなの「アピールパネルをつくりなさい」と言ってこれを宿題にしますと、みんな、我を競って、「これ、大学生がつくったのか」というぐらい楽しそうなのがどんどん出てきます。

このように、提出物を作品化するというのも大事なことだと思います。その人の個性があらわれるような。そちらに走り過ぎて内容がないといけないけれども、その表現のしかたに何か楽しさがあるようなことも実は大事ではないかなと思っています。みんな思い思い自分の研究したいことをこういうふうなパネルにして、壁に張って、見て回って「だれとチームを組もうかなあ」とか言ってやっているわけですね。

これらの作業は特別に難しいことではなく、大学生ならだれでもやります。楽しいからです。これでチームを編成していく。そのチームの編成も、各自のパネルの要点をラベルに書いてもらったものを、有志がおよそこういうチームができるんじゃなかろうかというようなことを、図解化してプリントして解説してから、パネルを見てまわっているのです。これを私がまとめるのではなくて学生がまとめるということがポイントなんです。学生がグルーピングして、そしてたたき台を出すわけです。それをもとにしてみんなが自分の好きなグループを再編しながらつくり出していく。ここが、学生参画型への誘導のポイントです。

今まで先生が何でもしなければならないというふうに考えてきた。もちろん先生の出番もあるんだけれども、こういうふうなことは学生のほうでどんどんできるんじゃないかなと思います。また、それのほう

が無理がないと思います。学生の手による、自己組織化ですね。

そういうふうにしてチームができ上がると、それ以後は大体安定的な発展状態に入るんですけれども、各グループでのミーティングは授業内でやるよりは授業外の時間にグループワークで行っています。すべての先生がこういうふうなことをやり始めると大変なことになるんですけれども、今のところだれもやってないのでできるわけですが、私は、将来は参画的なグループ活動する時間を投入する授業は、単位を増加すればいいと思っているんです。何に何単位出すかというのは大学が見識を持ってやることができるわけです。本当に学習活動をしている学び時間に対して単位を出せばいいわけですから、そんなふうに私は基本的には考えております。今こそ思い切ってやるべきです。

というところまでが今年の後期、今まで授業がどんなふうに展開してきたかということです。ちょうど今、水曜日のこの時間には終わっているんですけど、水曜日の9時から10時半までの1時間30分を学生が自分たちで企画運営しているという状態です。

4. ビデオ・ダイアローグ

◆授業前の準備の様子

> ここでは、当日流したビデオ（2001年11月31日水第7回目の授業を収録したものから、林が5シーンを選定）をもとに、参加者と対話的に解説を加えていった内容を、再編成しました。＊印は、その時の状況を補足的に説明した部分で、戯曲の「ト書」みたいなものです。C．は林のコメント、解説、Q．は参加者の質問、A．は林の回答です。尚、ビデオはダビングして清水先生にお渡ししてあります。

C．それでは、入りたいと思います。

＊　ビデオ鑑賞1分

Q．ドロップアウトしちゃう学生はいますか、途中で。

A．いや、あんまりいませんね。というのは、これは免許状の必須科目なんで、バイアスがかかっています。しかし、ほかの大学で参画授業をやっている先生方によりましても、おもしろいということで多人数授業でも余り減らないということです。ほかの大学はこういうグループワークして発表という方式ではなくて、それぞれの先生が思い思いに教科や自分の持ち前を生かされているようです。経済学の先生はまた別のやり方でという具合です。基本の考え方は学生参画ですけれども、自分自身が取り仕切るようなことが好きな先生もおられるので参与型に近い型もあるようです。その場合でも学生がそれをサポートしたり、部分的にになうというのが学生参画の基本の考え方です。

＊ビデオ観鑑3分

C．これは、授業の始まる前にちょっと打ち合わせをしているところですね。1年から4年までいまして、この学生は1年生なんですけど今回授業を担当しました。「私が企画する」と言って。4年生をさて置いて一番バッターをやりました。

Q．学生は70人ですか。

A．はい。70数人で今やっています。結構、1年生が活躍してくれています。変な先輩に汚染されていな

いので、いいですね。参画型に慣れさせるならやっぱり1年生からがベストです。そのインスティチューションに参画の風土を培うには、その入学した学生が4年になるまでの4年間かかると考えたらどうでしょうか。一足飛びじゃなくて、その学生がずうっと上がっていく。4年間ぐらいかけて少しずつクラスやコースの中に自主的にやれる風土文化をつくっていくということが大事じゃないかと思うんです。

C．これは次に出番のグループを事前に調整して、学生諸君が一生懸命にまわっているところです。

C．これは階段教室でやってます。このような固定式座席の教室でもグループワークは充分できます。参画に大切なことは、劇場風に舞台があること、学生がお互いに見わたせることです。

◆授業のスタート；オープニングプログラム

C．このシーンは、授業で「誰かを一人紹介しよう」というプロジェクトが立ち上がって……。この学生が企画をして、この学生が2分間で自己紹介しています。

C．今から新聞発表が始まります。本人たちは、大変緊張しているところです。なるべく多くの学生に発表のチャンスをたくさんつくろうと思っています。一言でも……。余り長くやらせないのがコツですね。30秒とか、長くて1分30秒とか。これ、次週の新聞担当の発表を係りが今やっていますね。

C．資料3は、1年生の司会の学生がワープロで打った授業企画書です。これで今日の授業の流れが共有できます。これが、今日の授業のコラボレーション・スケジュールですね。オープニングプログラムが20分予定してありまして、このシーンは、自己紹介が終わって、司会者があいさつをして、それから新聞担当、次週の新聞担当が発表されて、今から今日の新聞発表があるところです。次に、私の一言があって、先ラベルを記入して、メイン・プログラムに入る。参画型の授業で、学生が自ら運営していくという形になりますと、90分のうち最初と最後の計30分ぐらいはそれを計画的、継続的に自主運営していくための時間にどうしても必要だと思います。もう少しスリムにできますけれども、どうしても共同で共通理解のもとに運営していくための時間というのも必要になってきます。民主主義の原則のための時間みたいなものですね。それをむだと考えるか、どう考えるかによるんですけれども。

そして中身のメイン・プログラムは60分は確保したいですね。この日は、この60分で各チームの相互紹介を、1チーム1分30秒で17チームがダーッとやっていくという初めてのプログラムと、これから係活動が動いてきますので、その係の初顔合わせをやるプログラムになっています。

授業の最後に、各種アナウンスがどんどん出てきますのでアナウンスタイムをとるという形になっています。ここではメイン・プログラムが31分と書いてありますけど、実質ロスタイムが入っていますので実質50分～60分ぐらいが中身になってまいります。

資料2をもう一度見てみますと、Beard7というのが私がつくった新聞です。この時期になりますと、もう私の指導という形よりは後押しみたいなことが中心記事になります。どういうところを漏らしちゃいけないよとか、あるいはどういうところが学生による授業企画の評価の観点になるよということが記事として出てきます。

ここから学生作品です。資料4の特活新聞Aというのがありますけれども、A新聞というのは前回の授業の要点を休んだ人にもわかるレベルで新聞にしてあるわけです。こういうのも先生がやろうとすると大変なんですけれども、学生にまとめさせれば学生自身による授業観察にもなります。要点は何だったと、とらえたかチェックもできますし、要は、休んだ人も使えるということで。学生が、クラスの学びの状況を把握し合うことがミソです。

資料5のB新聞というのは、それまでの授業になかった風を吹き込みなさいという形で、今回はアフガン人で米国に留学できなかった人の話を取り上げています。

資料6のC新聞は授業の主流の流れに乗らなかったことを、学生の提出作品とかグループで話し合われたメモの中から、落ち穂拾いをしてみんなに紹介するとかというツールです。先ほどの作品サンプル(掲載割愛)を回しましたが、大変いい作品があるんだけれどもグループの話し合いに乗らなかったとか、場合によっては教師が取り上げなかったというようなことがあるわけです。そういうのを学生の目でもう一回敗者復活してくるという、そういうものです。これも先生が全部漏れなく見ようと思うと嫌になっちゃうんですけれども、学生に全体を見させると、「こんなにいろんな学びがあったのか、実はそういう人たちがみんな集まってこういう場ができていたのか」ということがだんだんわかってきます。要するに参画状態をつくり出す秘訣は、場の状況をみんなに把握させるということです。これまでの授業では、それを先生だけが把握して、場を握っているのは先生だと考えるから学生と共有できる場ができない。問題は、みんなで状況を把握するシステムをどうやってつくるかということです。

先ラベル新聞というのは、前回の授業で最初に書いたラベルをまとめた新聞です。それから、資料7の後ラベル新聞というのは、授業が終わってから、前回の終わりにみんながどんな感想やどんな発見をしたかを新聞にしてあるわけです。最近は全ラベルを公開して、もらいたい人のために、10セットぐらい僕の研究室のポストの前にあるからもらいに来なさいというふうにして、だれがどんなラベルを書いたかを関心のある人はもらいに来るようにしています。今のところこれらはペーパーベースですけれども、だんだんみんな慣れてきたらインターネット上でそういうことができるようになるんじゃないかなと思っています。実は、この新聞には中には大変すばらしいことがたくさん書いてあるわけです。

＊ここで、新聞発表とそれへの学生のコメントをビデオ観鑑（3分）

C．これは遅刻者が遅れて入室してきたので遅刻リストに自分で名前を書いているんです。遅刻者はみんなの前で、名前を書かないといけない、遅刻の理由は何かも。ただそれだけですけど、遅刻はグッと減ります。今A新聞を発表しています。それに学生がコメントするわけですね。

C．先生がよく『今日の新聞から』みたいなものを話題提供されることがあるようですが、先生がやるのもいいけれども、学生がやれば学生の関心のあるものが出てくるという形になります。言ってしまえば、教師のほうも楽しいという形にだんだんなってまいります。

こんな形で最初の10分か15分、だんだん慣れてくるとここは圧縮して、メインプログラムの部分をどんどんふやすことができるようになってきます。いよいよメインプログラムに入っていきます。

Q．先ほどお聞きしたら、画像を撮っている人はボランティアの人らしいですね。地域のボランティアの人は2名ですか。

A．そうです。ボランティアが2人入っているんです。私の授業はボランティアに来てもらって、大学の授業を受けられるからという主婦の方と、ある企業の役員までなすった、40代後半の男性ですけど、その人は、次の仕事を見つける間、私の授業を半年ぐらい手伝おうという方です。こういう方に来てもらって、授業でいろいろコメントしてもらうんです。

その男性の方がこのビデオを撮ってくれているんです。コメントなんかも、学生は私のコメントよりそういう人のコメントのほうを意外によく聞いたりして、ラベルにも反映されるんですね。だれのコメントが生きてきたかもこの新聞のおもしろいところで、ポッと言ったようなことが取り上げられたり、私が一生懸命言っているのに全然響いてないなという。楽しいですよ。

◆メイン・プログラムⅠ；チーム研究の報告

＊ビデオ観賞

C．チームの発表内容を少し解説しておきます。完全週5日制になってきますと小中学校のクラブ活動が

10月31日(水)　1限　特別活動研究企画書

今回の基本方針　　『定刻主義』

今回の課題　　『チーム新聞第1号』

今回のプログラムのねらい

① チーム紹介 ┐ チームを知ってもらう←チーム間の協力へ
② 係初顔合わせ ┘ 係りのメンバー確認←係活動の促進

予定メニュー　（司会 金子聖　大野達太）

I. OP（20.5分）

① 自己紹介の時間（岩下さんに任せます）　4分
② 司会者あいさつ　30秒
　コメントを言う人（前回の新聞担当者）を発表
　（この時に新聞担当者はステージまで移動）
③ 新聞担当者の決定　1分
④ 新聞発表　1人1分×6
　前回発表者からのコメント　1人30秒×6
⑤ Beardの今日の一言　5分
⑥ 先ラベルの記入　1分

II. MP（31分）

①『チーム紹介』
　グループワーク　5分（発表前の微調整用）
　発表　1チーム1分30秒×14
　1チーム終わるごとに林先生にコメントをお願いします。
②係り初顔合わせ　5分

III. CP（15分）

① アナウンスタイム（係など）　1人1分程度

② 最終コメント（ゲスト・ワーカー・林先生）　5分
③ 司会者あいさつ　30秒×2
④ 後ラベル記入　1分

後ラベルが記入できた人から終わりにしてもらいます。

予備の時間を20分ほど取らせて頂きました。
授業の終了時間よりも早く終わった場合はチームのデスカッションの時間に取りたいと思っています。（授業外ミーティングの時間や、フィールドワークの場所などを決める）

(Tel)　金子聖　090-[redacted]-2352
　　大野達太　090-[redacted]-5948

資料3

特活A新聞

2001. 10. 31(WED)

欧米文化学科3年　2995026　尾鼻 友里

最後の方では
時間が無くなり
慌ただしくなりました。
皆で協力し合い
より良いクラスワークを
したいですね。

<10. 24の授業の流れ>

司会：社会2年　田所寛聡くん
　　社会2年　吉田安希さん
ワーカー：大渡佳代子さん

オープニング・プログラム

1. 司会者あいさつ
2. 新聞担当者決定
   新聞担当表の配布
   都合の悪い日に担当になっている
   人は各自で前後の週の人と交換を！
3. 新聞発表
   来週からは学生によるコメント
   新聞発表者が次週のコメント担当
4. 今日のひとこと(林先生)
   参画の学びにはファシリテーター
   (facilitator：促進する人)が不可欠
   ↓
   学びの場が効果的かつ自主的・自治的に
   運営されるように仕事を行う人のこと
   SWからSFへ
5. 先ラベル『これからの抱負』

その他の発行新聞

- S−Tool Workshop(参画ツールワークショップ)案内新聞
- まるりん
- マーブル
- おかあさん新聞

メインプログラム1　チーム結成<第2次>…田所くん・吉田さん

1. どのチームにも入ってない人や新しいチームを作る人からの呼びかけ
2. 各チーム、個人作成による「学びプラン新聞」を用いての話し合い
3. 各チームで話し合った事を発表
   先週のチームでまとまってきたチームや、研究内容の違いや、人数が多いために分離したチームがありました。着々と決まってきています。

メインプログラム2　係り活動調整…金子暁さん(欧米3年)

各係りからのアナウンス
地道に活動している係り、まだ活動していない係り、あったらいいなを実現した係りがありました。詳しく知りたい人は、係り新聞を見るか、金子さんに相談を！

緊急募集…メール係り、毎回の企画担当者、BGM係り

・ホームページ係
・仲介係
・エピソード紹介係

クロージングプログラム

1. 次回クラスワーク企画者…大野達太くん(社会1年)・金子聖くん(社会1年)
2. 課題：金曜昼休みに発表
3. 後ラベル『自由な感想・意見・提案』

資料4

10月31日（水）1限

特別活動研究　B新聞

比較文化学科２年　坂本 浩美

資料：東京新聞

平成13年10月28日（日曜）朝刊

社会面　／　30頁

連日、米・英両国によるアフガニスタン攻撃が行われ、その犠牲者が一般の国民にも及んでいることが報道されている。

この記事は、教育面での犠牲について取り上げられている。

紙面によると、自由を掲げる移民国家である筈のアメリカが、アフガニスタンの国民だからと留学生の受け入れを拒んだことが判る。

アフガン難民の就学率はおよそ７％。この数字からいっても、彼はエリート予備軍であり、将来の国を担う立場だろう。

現代においてもこの種の差別が生じている現実を、私達は見つめなければならない。教育者の一員として、国境や差別の無い教育を当然のものにしなければならないと思う。

米国留学生たち

『アフガン人だから』遠のく再建

教育

資料５

資料6

C2新聞

《各グループの学びプラン》

[8G：係活動]
- 個人で係活動についての知識を深める
↓
- グループの中で話し合う
↓
- フィールドワーク
↓
- 発表会

※学校だけでなく社会や地域などでの係活動にも注目していきたい。

[9G：ドラマ教育]
- ドラマ教育についての知識を深める
↓
- メリット・デメリット、海外との違いについて考える
↓
- ドラマ教育をとり入れているところに話を聞きにいく。
↓
- ドラマ教育を特活でどう生かせるか？
- 学校でドラマ学習をするために。
- ドラマ教育の可能性。

[10G・11G：外国の特活]
- 調べる（外国にはどんな特活があるのか
日本との違い
生徒の取り組み方は
特活の背景　etc
by インターネット、雑誌、本…）
↓
- F.W（アメリカンスクール？
帰国子女・留学生へ
インタビュー）
↓
- 外国の特活を日本の教育に生かせないか？
- 日本の特活を外国に生かせないか？

グループの人数が多いので2つにわけるのに苦しむ中…。

[12G：生徒と教師のコミュニケーション]
- 自分の経験を振り返る
- 資料を使って調べる
（どのように定義づけられているかetc）
- アンケート
- ラベルワークを活用
↓
- グループで話し合い
↓
- 教師と生徒がより良い関係を築いていくために教師は何ができるか？
- 生徒はどのような関係を望んでいるか？

4年間で教育実習での経験も生かせる!!

[13G：合同発表会における企画・運営]
- 前期の発表会を振り返る
↓
- 合同発表会の意義を考える
↓
- 前回の改善すべき点を考える
- 新しい風を入れよう（武蔵OBetc）
↓
- 企画・F.W・社会調査
↓
- 発表会「場づくり」の提供

興味深い学年がたくさんあります。

[?G：学校行事]
- 調べる（学校行事とは何か？
自分の経験・資料を使って）
↓
- F.W（学校へのアンケート
実際に行ってみる）
↓
- 今後の学校教育はどうあるべきか。

☆まとめ☆：
発表会までのプランが似ている人が多かったのが印象的でした。前期学んだことが生かされていると思うので、今回は他のところにも力を入れられて、前回以上のコトが期待できそうなのでとても楽しみです。
個人的には、13Gの武蔵のOBにこの授業の話を発表会のときにしてもらうという案を実現してほしいと思った。それと「ドラマ教育」というものを初めて聞いたのでもっとくわしく知りたい。

欧米文化・3年・菅谷真弓　Oct. 31st. 2001

後ラベル新聞　特別活動研究

10月31日 欧米文化 3年 森 由香理

今回集まったラベルは計69枚。みなさんのやる気がぎゅっとつまったラベルばかりでした。そのうちの何枚かをここで紹介してゆきましょう。

係活動について…

10/24 特活〈後〉欧米 3年 小野寺 真理
係活動の調整がもう一度必要だと思う。私自身ももう一度係のことを考え直したい。

10/24 特活〈後〉2005179 山本香織
係活動の重要さをあらためて感じた。今まで全く活動していなかったのでこれからは積極的に行動したい。

10/24 特活〈後〉2005041 栗野祥子
みんなで自主的に係を提案したりしていて授業をみんなでつくりあげている実感があります。よい授業にしましょう。

みんなのじがけで授業は作られてゆきます…。

クラスの人数が多い分だけより多くの係が必要なんですね。みんなちゃんと気がついています。

10/24 (後) ユニークな係がたくさん出てきた。上手く機能したら、より楽しくなりそうだ。
社会 ③ 3997015 石井 泉

10/24 (後) 「感想」 自で紹介係など独創的な係が出来上っていたので活動に期待します。
欧米文化 3年 2995158 松浦 賢明

10/24 (後) 感想 社会4年 石渡直子
色々な係ができて、みんなが積極的に活動していることが、とても印象的だった。自で盛りとげると楽しいですね。

グループ活動について…

グループワークのスタートダッシュがはじまりました。

回(後) 社会3年 3997096 白石 耕平
学びの方向が定まりつつあるのでそれを大切にしていきたい。さて、グループの集まりどうしよう。

10/24 特活〈後〉欧米3年 南愛彩
チームで話し合い、どのようなことを研究していくかが見えてきた。どれも具体的なものにしていきたい。

10/24 〈後〉特活 欧米3年 加藤美雪
グループで話し合い、だいたいの方向性が決まってきた。係活動も始動し、チーム内でも、役割を決めて進めたい。

10/24 後 〈自由な感想〉 欧米3年 山内由紀
F.W についてもっともっと話しあってすぐにでも実行にうつしていきたいです。計画的に後でまたやりたいことが増えてきたので大切にしていきたいです。

10/24 〈後〉特活 比較3年 浜文
チームが決まった。先生とおれるかもと言われてうれしかった。フィールドワークにたくさん行くようなので時間の調節が大変そう。これからが楽しみ。

がんばれ!!

10/24 〈後〉「感想」 今日の授業はそれぞれプランを出しあい少し活気があった。これを空想に終らせないようにこれから頑張ろう。比較3年 2998028 小林加奈

10/24 回 後 欧米3年 2995095 田島結
みんなの姿を見て、クラスに貢献するということは、本当に大変な事だと思いました。自分も少しずつ貢献できるように…。

回 10/24 特活〈後〉感想 2005075 小林なおみ
すごくみんなのがんばりが感じられた。自分ができることはいっぱいある。進んでやらねばっ!

10/24 (後) 「感想」 2005121 舟木 聖
様々な計画がかいてあったが、実行したけれども意味のないものにならないように実行することに力をいれさらに報告にかえられたりできる。

みんなの力でクラスを成長させましょう。

係活動・グループワーク授業そのものにとても大きな期待と気合いが感じられました。これからの活動中味のあるものにしたいですね。

今日はハローウィンだっ！いたずらはほどほどに・・・。

資料7

なくなりまして、部活もあわやというような状態にだんだんなっているんです。そういうような問題をぜひ取り上げようということで、あるチームが研究している、その最後の部分です。

実は、このチームの研究テーマの立て方にも秘密があります。文科系だからできるのかもしれませんけれども、今の大学の部活動に反映させ、小中学校の部活の研究をしようというスタンスで、チーム研究を進めている。自分の日常の生活につなげて「知」を扱っていく。彼らが真剣になっていくことと、このようなテーマの立て方は、大変関係があるように思います。

C．こんな感じでコメントしていきます。その場でパッとやってしまいます。1日前にレジュメを出してくれればもっと違ったコメントもできますが、その場で1パツでやるのも楽しい。こんな形で各チーム2分の発表が、スピーディーにずっと続いていきます。

◆メイン・プログラムⅡ；係活動ミニ集会

それで今回もう1つあったプログラムは、この授業で係活動がクラス全体で始動し始め、係活動をどうやってつくっていくかを係ごとにミニ集会を持って話し合うわけです。結局、係というのは授業を進めていくためのいろいろな手分けした舞台づくりの作業です。

Q．これも特別活動という授業の一環として位置づけているのですね。

A．そうなんです。なるべくそういうふうに授業に位置づけていくようにしています。ここは知恵の出しどころです。何も教育学だからそういうふうに係活動するわけではありません。小中学校では係活動があるんです。うまく機能していないだけです。例えば工学系なんかでも学生が工学教育そのものに関心を持ったっていいのではないかと私は思っているんです。工学の学習法とか工学の教育法みたいなものは教育学だからできるというふうに考えないでほしいのです。このようにすれば、工学部の先生がおやりになっている工学教育そのものへの研究関心のすそ野の部分が、先生の授業を受ける学生の中からもっと出てくるんじゃないかなと思っているんです。

経済学なんかでは参画授業を通して経済学教育を勉強したいという人が出てきていたり、あるいは看護そのものの勉強じゃなくて看護教育を勉強したいという人が育ってくるということがあるみたいです。要するに先生の弟子ができてくるということです。先生の後継者が育ってくる。そういうようなセンスがだんだんみんなにシェアされていく。今の授業ではそういうのが余りにもないので、今のところ先生だけが踏ん張っているので、ちょっときついところがあるんじゃないかなと思っているんです。学生参画型の授業は、このような、自然な後継者養成の意味もあるようです。

C．資料8、資料9を見て下さい。これも学生の係コーデネーターがつくったもので、いろんな係ができてくる。

こうような形で学生が自らそういう必要な係を組織していく。そういう係を分担しながら、学生がどんどん授業をつくり出していく。学生の学びの空間でのテーマ追求がうまく進むように、1回1回の授業がうまくいくように係をシフトしながらやっていって、必要なくなった係をどんどん消滅させながら、やっていくという、そういうふうな形で進めていきます。

この後、クロージングプログラムに入るのですが、割愛させていただきます。

C．以上が、大体の授業の様子です。今、授業は、中間点を曲がって、いよいよメインのストレッチに入ったところですね。

◆今後の授業展開の予定と評価法

今後どんなふうになっていくかといいますと、この後フィールドワークをして、それから全体発表をします。このときには私の他の授業も一緒になって合同発表会を、12月15日の土曜日の午後、6時間ぐらい

資料8

係新聞 NO.4

10月31日
発行者:欧米3金子暁

まだ係活動登録用紙を提出してない人は早めに提出して下さい。

どんな係があるか見てみよう

①メンバー、②具体的な仕事内容、③みんなへのメッセージや要望

印刷係

①欧米3河本麻衣子・加藤美雪・尾鼻友里・
横川真輝子・菅谷真弓・吉原結
②火曜ー昼 12:30〜、水曜ー朝 8:15〜印刷
研究室前. 火曜-12:30・水曜 8:15 までに提出
③水曜の朝は印刷量が多い為、なるべく新聞は
火曜日の昼までにお願いします。
印刷物を持ってきてくれる準備の人募集

準備係

①比較3濱文・小林加奈・比較2坂本浩美
②始業前までに、授業で必要なものを用意する
(ラベル・セロテープ・ホッチキス etc.)
印刷係との連携も考えている。
③もっと人数がいてもよいと思うので、募集中
です!

プリント整理

①欧米3西本由美・松浦克明・社会3石井泉
②新聞やプリントを日ごとに整理しておく。
毎回、前のプリントを授業に持っていき前回休んだ人がとれるようにする
各プリントは、最低10部置いておけるようにコピーする。
③プリント整理係は3人しかいないけれど、「新聞回収係」がたくさんいたと
思うので連携させてやっていきたい。
朝のプリントに関しては、印刷係と連携させてやっていきたい。

新聞回収係

マイク係

①欧米4福田隆行・欧米3小澤明日香、
社会3山口英理
②マイクをもってきて返却する。
③授業が長引くと、マイクの返却するのが
遅くなり次の授業の先生に迷惑がかかる
のでみんなで協力して授業を進めましょう
何か発表があるときは早めに。すぐ返却に
いきます。

遅刻管理係

①社会3押切ゆい・原田裕江・欧米3森由香理
欧米2篠寺真紀・奥野祥子・村越由子
②遅刻者リストの管理
当日のチェック
リスト表の管理
遅刻が多い人への警告
③遅刻しないように努力しましょう。

ラベル回収係

①欧米3塩島直子・高崎和美・欧米2関根理恵子
比較3関本香織
②授業後ラベル回収
授業前にラベル(約80枚)と、ラベルを貼る紙と
許可証を研究室からとってきて用意する。
③混乱しやすいので、きちんと分別してください。
なるべく早めにラベルを提出してください。

黒板消し係

①欧米4大井・欧米2山本香織・比較2北村理恵
藤井亮太郎
②授業前ーペンなどを用意する
授業後ー黒板をきれいに消す
黒板周辺を整理・整頓する
③授業後責任もってきれいに黒板を消すので、
クラスの人たちに伝えたいことなどあったら
どんどん活用してください。

自己紹介(仮)係

①社会3岩下均・丸山友也・藤聡史・白石耕平
欧米3山内由紀・小野寺真理
②BGMを活用しての自己紹介タイムの運営
事前に当人にインタビューしてペーパーを作り配布
1分くらいで教育関係のテーマにそってプレゼン
してもらう。

ねらい
・授業内のエンターテイメント性アップ
・MPに入る前の心構えの時間作り. 気持ちの
整理. 集中力向上のための時間
・グループ内交流に限らず特活クラス単位での個人
交流を促す。
・刺激の Give and Take ー出会いは人を変える
※内容はその都度フレキシブルに変えていくつもり
③みんなで特活の授業を作っていきましょう
楽しく学び、場を創っていこう
アイデア募集中!!

後かたづけ・ごみ拾い係

①社会1相澤真陛・欧米2加納温子・山田真一
渡部亜由美・星川聡子
②ラベルの耳を拾う・ごみ箱設置・係り分担 etc

新聞担当割り振り係

①欧米3藤岡奈緒美・南雲彩・田島結
②毎回の新聞発行者の管理
③担当週は休まないようにして下さい。また
担当(発表)の週を間違えないようにチェック し
ておいてください。変更の際は必ず私たちま
で連絡してください。

仲介係

①社会1金子聖・大野達太・欧米2秋葉慈子・
内田えみ・小林なおみ
②行き詰まっている人へ、手助けのきっかけを
お手伝い。
③気軽に連絡してみましょう。メンバー募集中

ホームページ係

①比較3吉田かおる・欧米3笹井豊文
②HP 作成・企画案
学習発表会のページ・連絡・企画 etc.
ワーカーさんのページ・まるりん, テープルの Web 化
③理想はバーチャル学びの場. 新聞を up するつもり
なのでワードで作ってくれるとありがたいです。
URL:http://members.tripod.co.jp/m-sankaku/
メール:m-sankaku@hotmail.com

会計係

①比較4青藤雄一・欧米3尾鼻友里・梶裕人
②クラスで使われるお金の管理
・領収書. 経費を集める
・代替者に分配
会計報告書の作成
③クラスで使ったお金に関しては必ず領収書をも
らっておいて下さい。
期日までに必ずお金を払ってください

印刷係新聞

１０月３１日　発行者：欧米３年　河本　真衣子　加藤　美雪

＊ 印刷係とは･･･

みなさんが書いてくださった新聞や授業に使われる資料を印刷する係りです。

＊ 印刷係の仕事

主に火曜のお昼と水曜の朝に印刷しています。新聞担当者は下の詳細の表を見て、新聞を提出してください。

担当者	提出期限	提出場所
欧米３　菅谷 横川	昼休み前	林先生のポスト
	12：20	教授棟前
欧米３ 河本 加藤 菅原	8：30 まで	林先生のポスト

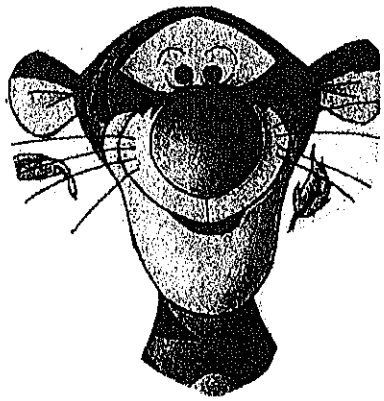
注意点

1. 字はなるべく濃く書いてください。
2. なるべく原本ではなくコピーを提出してください。
3. 時間厳守です。
   間に合わない場合は自分でコピーしてきてください。

連絡先

火曜　　菅谷　真弓　　090－[redacted]－1872

水曜　　河本　真衣子　　090－[redacted]－0185



資料９

ぶち抜きでやっていきます。それも学生が企画運営するという形でやっています。それが終わったら最後まとめをして授業は終わりになります。

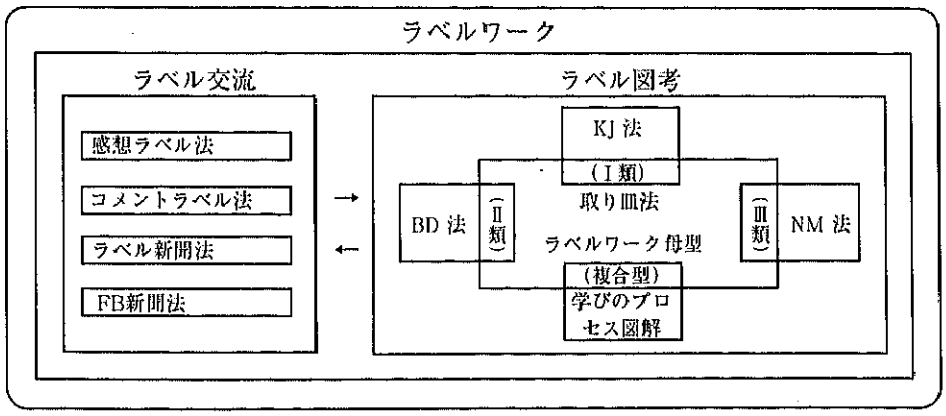
提出物ですけれども、1つは、1回1回感想ラベルを書いていますので、その複写式の感想ラベルのうちの、黄色いのは新聞をつくるためにすぐ使います。赤は私がもらって帰り毎回楽しみに読みます。白ラベルは自分がとっておいて出席表を兼ねた出席ラベル表に貼って出してもらう。3枚できてますので、もし不正をやれば必ずわかる。そして、その15回分たまったものを、それをもとにして学びのプロセス図解というのをつくっています。

感想ラベルを、15回分並べて見ていきますと、そこから自分の意識とか、かかわり方とかがどんどん変化して、何を学んだか、これからどうすべきかが大変よくわかるんです。教師が考えている以上に学習者はどんどん意識が変化していっているものなのです。それを本人自身も気がつかないだけです。1回1回ラベルを書くのは、2分か3分なんですけれども、それを書いてためておくだけで、そこがちょうど「リフレクションのドアの入り口」みたいなもので、そのかぎをあけさえすれば、一人ひとりの中にその時その時の思い出とか、その時に考えたことなんかもワッと出てきたりします。これを図にしたものが学びのプロセス図解で、これが評価の対象になります。もとラベルは、不満でも反論でも何でもいいんです。それをもとにしてどう自分が振り返って何を発見するかということが大事だと、いつも言っています。

もう1つは、これは学びの内容のまとめです。私の特活であれば、特別活動とは何かについてどういうことを学んだかを、ラベルを自分でつくって図解化します。また、1回1回の授業でできてくる資料をファイルにしなさいと言っています。ポートフォーリオというふうに最近は言っているんですけれども、要するにファイルです。ファイルをつくって自分で整理をして、その中から学んだことをもう一度ちゃんと整理しながら気づいたことをラベルにして、それを図にしなさいと言っているわけです。貴大学で、このラベルワークについてのワークシップのチャンスがあるといいのですが…。図8を参照して下さい。

Q．ポートフォーリオは1回1回の授業で、新聞など出てきたものを、一人ひとりがそれだけ持っているわけですね。

A．そうです。終わったらこういうのができるということです。「これは何年たっても使えるように自分で保存しておきなさい」と言うと結構やります。これを使って後輩の1回目の授業のときに来てもらうとか、このファイルを後輩に見せるという仕掛けをすると大変一生懸命やります。やっぱり学生作品で学びをつないでいくということが大事ですよね。



(2000.林)

ラベル交流は「ラベルケーション」、ラベル図考は「ラベルアレンジメント」または「ラベリング」という愛称で呼ばれている

図8　ラベルワーク（LW）の概念図

何のために資料をつくっているのか。先生に評価してもらうというふうにすると、それ向けのものができてくるんだけれども、後輩がそれを使って、それをある意味で踏み台にして次に進んでくれるということになると、この中にずうっと熱いメッセージが出てきます。自分の学んでいる意味がだんだん見えてくるという形になってきます。理科系でも、そういうことがきっとできると思うのですけれども。

レポートをグダグダ書くよりは図にしなさいと言って、学んだことを図解に作ってもらいます。その方法は、何も教えないでも、ラベル図解を1～2枚見せれば学生はすぐやってしまうという時代です。

盛り上がった学期は学生たちが自主的に授業の報告書をつくります。みんなからお金を集めて、1977年度の方法論という授業では、こういう報告書が1人1冊ずつ手元に残る。学期によって、できたりできなかったりするんです。強制はしません。

今年は夏に、幾つかの授業体験者が合同で「麦わらリポート」という、私の授業を解剖して学びをもう1回振り返ってレポートしたものをつくっています。彼らは、また後期の授業に出てきて手伝ったりいろいろしていますね。後輩に参画授業のやり方を伝えたりしていますね。スチューデント・ワーカーと呼んでいます。

これからの大学の財産というか、学びの場の財産というのは、次の人の学びのタネや土壌になっていくような文化とか、そのような人材をどれだけ抱えているかが重要でしょう。自分のために何かいい学びをするということだけじゃなくて、次の学びの体制をつくりながら自分の学びをつくっていくという、要するに先生たちが現に研究活動で、今おやりになっているようなことを、もう少し学生が自力で日常的にやれるように道を開いていけば、学生たちも本当の意味で先生方の力強い仲間になってくれると思います。

以上、長くなりましたけれども、話すことは一応終わりました。

---

5. 参画授業をめぐる総合的なQ＆A

◆参画授業ではスピードがきめて

Q．一応90分という制約でおやりになっていますけど、いろいろおやりになっていて、もっと時間があったほうがいいなとか、あるいは短くてもいいなとか、そういう時間のことで何か感じられることはございますか。例えば2時間続きのほうがいいとかね。

A．私は一応90分の中に抑えてやっていって、かなりスピーディーにやっているんです。そのスピーディーさが脳の活性化には関係があるかもしれません。

Q．余りダラダラやらないというわけですね。

A．絶対にダラダラやらない。例えば1チームの発表も、最終の全体発表会でさえも10分とか15分ぐらいです。

Q．そうすると、あの部活のテーマに関しての最後も10分ぐらいですか。

A．そうです。

Q．しかし、それまでに中間発表的なことはあるわけですね。だからみんなわかっている。

A．そういうことです。だから、普通の1回1回の授業のときには1人1分とか30秒とか、そういうふうな形でかなりスピーディーにやっています。けれども、もう少しゆっくり取り組まれる先生がおられれば、2コマぐらいでゆっくりやっていくというのも大変味があるんじゃないかなと思います。それから、1コマ準備、1コマ本番というようなサイクルの授業にすればどうでしょうか。

◆授業から学ぶ、内容を、学生自身が創りだす

Q．授業の本体というか、本当に学生が発表する内容を学生諸君が勉強するのは全部授業ではない時間にやるということですよね。

A．そうです。今のところそういうことになっています。基本の方向は、授業外でどういうふうに学習するかを指導するかということも、これからの大学の先生の仕事ですので、そういう意味では、外側でああしろ、こうしろというだけじゃなくて、簡単に言えば、内側の授業をやりがいのある構造にする。とにかくみんな1品持ち寄る知のパーティーなんです。授業をそう考えればいいと思うんです。みんながそれぞれ1品持ち寄って、さらにいいものをつくってみんなでシェアする。食べ物は食べると減るけれども、知識や情報はみんなで分けられる。しかし、もともとどれだけいいものを持ってくるかによって学びが左右されるわけです。

それに、授業で学生が発表することに意味があるのではなく、発表したことに先生や友達からコメントをもらうことが重要です。また学生は、発表を聞くだけではなく、コメントしたり、考えあったりすることが重要です。すなわち、学生諸君は、授業で友達の発表を聞いて十二分に勉強している。要するに内容・中身を、学生が創りだす点がポイントです。第1類の、第1モードの参集型では、先生が……。

Q．全部やらなきゃいけないわけですね。

A．ええ。第1モード参集型とはそういうパターンだったわけです。第3のパターン、すなわち参画型は、みんなが教えたり教えられたり、みんなの産物を持ち込む。だから、学生の持ち込む内容の質に左右されるわけですから、怖いと言えば怖い。怖いからみんな何とかそれをいいものにしていこうと、逃げられないシチュエーションをつくっていく。

◆既存の知識の系統性と参画性の矛盾

Q．理系だと何か順序が要るような気がするんですよ。これの理解の上に、この次のテーマがあってみたいなね。先生がおやりになっている授業だと、一応は分解してしまいますね。その順序ということは問題になりませんか。

A．文系の私の場合にはそういうふうにしてますけれども、理系でも、私の暴論で言えば、ほんのわずかな前提らしきものしかない者が、彼らの既有の総力で、どんなふうに組み立てていくかということをまず出させて、場合によっては、ちょっと失敗してトラブらせながら、発表してみて本人たちが独力でやったことを通して実は、これには順番があるというようなことを発見することが大事じゃないかなと。そういうことがわかった時点で、先生がある程度体系立ててやることが大事ではないか。

科学者の発見、発明の基本のプロセスは、これではないか。それなのに、そういう場面があまりにないのではないか。

Q．それを目的にやっているんですね、実は我々もね。

A．そうなんでしょう。やっぱり。それをこうだよ、それがいいよって。それは答えなんだけれども、それを試行錯誤的にその意味を発見的にわかるプロセスを保障してあげることが大事だと思う。さらに言えば、そういう違うアプローチの道も残してあげて、「うん、なるほどおもしろい。大事なことは結果なんだから、そのプロセスでやってみてごらん」というような道もあけてあげたほうが、違うパスから入ってくる道を開く力を養えるということもあるんじゃないかなと思っているんです。

Q．ロボットコンテストをやってまして問題になるのは、最後にロボットができて、走ってくれないといけないという大原則です。学生の主観的評価だけじゃなくて、どうしても客観的評価が入っちゃうところでは、教師はどうしてもそういうほうへ持っていく。理科系で物づくりをやると必ず引っかかってくるところです。そういうプロセスで学生自身勉強するとはどういうことかがわかるというのが大事だと

いうことですか。先生がおっしゃるとおりだと思うんですね。

A．先生がおっしゃる絶体絶命の、ロボットが動かないとだめだというのと同じような本物のシチュエーションを文系でもつくらないとだめですよね。その上で、プロセスを重視して、見守るのが教育ですね。

Q．なるほどね。

A．例えば、半期のチームの研究の成果を、発表会のわずか15分でみんなを感動させないといけないような本番がないとだめです。絶体絶命の本番のシチュエーションをつくってやってやることが大事じゃないですかね。

Q．そうですね。実はロボットコンテスト最後の発表会は学園祭のイベントになっているんですよ。お客さんを呼んで、そこら辺の研究所の人が来たりする。そういうところで見せなきゃいけないというんで、先生がおっしゃる絶体絶命に持っていくようにやっているわけなんです。教室以外の時間に、相当学生がやっていると思いますね。夏休みが勝負ですね。

A．長年、指導実践をやってみて結局は、参画授業をやろうがやるまいが、要するにポイントは、教室以外でどれだけ喜んで勉強させるかですよね。これが本質だと思いますね。

Q．実際、年間3単位の授業のうちの2単位分というのは、準備学習ですよね。予習、復習に、教室外の活動に2単位与えているわけですね。授業そのものは1単位しかないんです。

◆参画授業と教師のマンネリ化の克服

Q．先生はもう10年ぐらい、例えば特別活動の授業を担当していますよね。そうすると毎年学生は替わりますね。その作業とか展開については10年間試行錯誤があっても1つの流れができてますよね。それで、先生自身があまりマンネリ化しちゃうと困るという、その辺はどういう工夫をされていますか。

A．学生が毎年、新しいからでしょうか、それから私の関心がどんどん移っていくということもあります。今期は新聞を強化しようとか、ラベルワークとか図解を強化しようと、こっちのほうの興味の変化がある。それから学生のほうも全然違うテーマ、関心が全然違ってくる。やっぱり毎年違うんじゃないでしょうか。だから飽きたとか、もう楽にいけるというようなことはほとんどないです。知識の水準を保障して安定的に学生に保障するには、その都度一生懸命にやっていかないと参画型はできない。例えば学生が授業の企画をするような段階では、電話とかファックスでやりとりすることは毎回やらないといけないので、いつまでたっても先生は楽にならないと思います。私はこのプロセスこそが教育だと割り切っています。参画型で共同作業をするから、学生と教師の人柄、個性があらわになって、そこに教育が顔を出すわけです。

先生がおっしゃったことで、もう1つ自分でできていないことで組織的にやらないといけないなと思っていることがあります。学生がつくり出してきた作品をもう少しちゃんとした仕組みで保存して、卒論のライブラリーじゃないけれども授業のライブラリーみたいな形で残していって後輩がそれを利用できるようにする。教科書を利用すると同じように先輩たちの足跡から学んでいくというようなものをつくることです。先生の研究業績に一足飛びじゃなくて、その間に先輩たちの業績があると、はしごになるんです。この辺のところがズボッと教育のリソースから抜けているので、ここをもう少し充実させられないでしょうか。

Q．それは確かにやっているんですけれども、だんだんレベルが上がってきて、最初1年生が取っかかると壁が高くなっちゃうという問題もあります。

A．なるほど、ありますね。

Q．だから、やっぱり目標、テーマを3年ごとに変えて、ロボットがやるべき仕事を変える。だけど難し

くなっても困るし、目先を変えなくちゃいけないし、そこら辺をどうするのか……。でも、このラベルはおもしろいですね。こういうのはやってないんで、うまく使えると我々のところでもおもしろいかもしれないですね。

◆参画授業におけるグループ活動の特色

Q．こういうグループで作業する仕掛けは、理科系ではいろんな学生実験というものがあります。数人で1つのテーマを与えて比較的自主的にやるわけですけれども、そういう中で一番困るのは、どんどんやっていく人と、やっていく人についていく人、余り活動的じゃない人ができてしまう。それを我々はグループに課題を与えまして、評価するのはグループ全体の結果として見るけれど、グループの中での個人のいろいろな温度の違いをどういうふうに評価するかという問題が常にある。そのような問題はそちらの授業でもあるんでしょうか。

A．やっぱり、グループ内でその問題はありますね。

Q．特に我々のほうの評価の問題としても問題だけど、学生間の中で非常に強いストレスがこれによって生じることがあると思うんです。

A．そうなんですが、今回紹介したぐらい授業が成熟してくるとみんな余りズルはしない、ズルはできない。緊張感がありますので。そういうぶら下がりを許さないような雰囲気がチームやクラスに出てくる必要はありますよね。それを許さない、甘えない。許さないほうも大事ですよね。許さないようちょっと注意する。『勉強しないで単位を取るような者を助長する必要はない、それは友情じゃない』と。そういうようなたぐいの話はやっぱり学生に常に言ってあげる必要があります。

Q．今、授業を見せていただいて思ったのは、4年生になって卒業研究をやり出すと、それぞれの学生が同じ4年生間で全く共同で助け合わない。先生と4年生の間だけでやろうとする傾向が非常に強いですよね。だから、もしこういう授業が我々の工学系のほうでもあったら、このような授業を通ってきた学生と通ってこない学生では恐らく差が出てくる。

A．そうですね。きょう見た授業の司会をやった1年生というのはどういうチームをつくったかといったら、4年生の余裕がある学生と3年生と一緒になって4年生から大変学んでいるんですね。だから、何でこの1年生が2人も授業企画者として出てきたかと言うと、どうも4年生がそれを指導したというんでしょうか、大変いいサポートをしているみたいなんです。そういう意味で言うと、同質にするよりも異質の味というようなことが大事じゃないでしょうか。

Q．そうですね。だから、院生と学部の学生で、院生がチューターというんじゃなくて院生も一緒にやる形で、何かこういうのができないかなと実は思っているんですけれども、なかなか院と学部生を一緒の授業でというのはこれからですね。

A．私の授業では、スチューデント・ワーカーとかラーニング・アシスタントと自分たちが名前をつけてきて、後輩と一緒に学ぶ、もう1回学び直すというシステムです。やっぱり、最初にも言いましたけれども、“教える形で学ぶ”とか“もう1回教える側がレビューしたら学びが完成する”というような風土が必要じゃないですかね。

◆ＡＯ入試で参画力のある学生を採る

Q．ロボットコンテストでもこの間優勝したチームが写真に出ていたんですが、実は、ＡＯで入った人がチームの主要なメンバーになっていました。いろんなところでそういう頑張って何かやる人が入ってきているので、こういう授業があれば喜んで司会者を次からやるような人が出てくると思うんですけどね。

A．そうですね。だから、ＡＯでの評価の項目の中にはいろいろ着眼点がありますけれども、大学に入っ

てきて大学づくりにコミットする、授業をつくるというような能力もちゃんと評価してあげるとよい。一緒に学びながら、自分の入った学科をつくることができるということについては、高校での実績も評価点にし、ポイントとしてカウントしてあげれば、大学としては大変メリットがあるんじゃないかと思うんですけどね。

Q．そういうコミットするからこそチームがまとまって優勝するということができやすい。やっぱりそれが出てきていると思うんですね。

◆参画授業における社会人ボランティアとしての活用

Q．地域のボランティアの方に入ってもらっているようですね。大学に直接関係ない人も授業に入れるというユニークな方式をやっておられたんですけれども、ボランティアの方にどうやってあそこの中に入っていただいたのか、そのセレクションの方法みたいなものはありますか。

A．1人の方は、参画授業の中で先輩たちが地域の研究をやった時に、地域の生涯学習のところに出かけていって調査をやったんですね。それがきっかけで、夏休みに有志で教育を考えるというようなプロジェクトをやって、そこで知り合いができて、「先生の授業に出ていいか」という方が出てきました。それが1人。もう1人は、全くの私の知り合いです。過去においては卒業生の主婦が、ちょっと一息ついて「もう一回授業に出て先生のお手伝いしようか」とか言って、そういうのが授業に出てきたりしました。ボランティアとかゲストというのは数じゃなくて、1人いれば全然視点が変わってきますよね。

◆芸術アプローチが参画授業の幅を広げる

Q．お話を聞いて、こういうのを導入したいなという気になって聞いていたんですけど、ただ、基礎的に知識を習得する授業と演習的に行う授業と、やはりできるものとできないものがありそうですね。芸術のほうでこういうのがどういう形でできるのかな、その具体的な方法をどうしようかなということを考えてみたんですけど、まだまとまってないのでうまいことコメントできないんですが……。

A．私はこの参画授業をやってみて毎期の授業で非常によく共通点としてわかってきたことに、発表の最後のあたりになってくると、何かそれを劇にしたいとか、芸術的作品にしたいとか、音楽をやりたいとかいうチームが出現する。レジメをつくろうとするんじゃなくて、レジメやプレゼンでは言えないので15分の劇にするとか、そういうことを学生が言い始めるのです。科学と芸術というようなものをもう少し近づけるように“学問する”というか、それはもともと近いんじゃないかなという気がします。自己表現の方法としての学問や科学はあるのかもしれません。大学側は、専門分野にかかわらず、もっと芸術に近づいていって、観察の方法とか、表現法とかに芸術みたいなものを入れていくということが、将来の大学を本当に人間復興の場にするためには大変関係があると思います。先生の発言とは直接関係ないかもしれませんけど、そういうことは参画授業をやっていると何となくわかりました。

◆参画授業導入の本質的意義は参画教育

Q．私も思うんですけど、知識を詰め込むのとはちょっと違うんですが、でもこういうのをやっていると自分で勉強しようとしますから、知識が入らないわけじゃないんですよね。さっきからちょっとこれを基礎工学類でどうしようかなと考えていました。お話を聞いていると、例えば先ほどの学生のコメントラベルを見てても、4年生が「久しぶりにみんなと一緒に1つの目標に向かって努力することがすばらしいと感じました」と書いていましたね。そのこと自体、私には、非常にショックで、4年生になってもそんな経験がないんでしょうね。そういう経験さえない学生が研究室に入ってきてこれを指導するのは非常に難しいなと。だからこそ、そういう経験を工学に直接関係なくてもやらせるだけでも非常に実があるというふうに私は思います。

A．参画授業というのは、参画型という授業方法にユニークさがあると同時に、参画力をつけるという授業目的にも教育的意味がありますね。私は、この両者を統一した教育を参画教育と呼んでいます。

◆カリキュラム新区分にモードⅠ、モードⅡ、モードⅢがヒントになる

Q．私が感じたのは、今まで授業のカリキュラムというのは、科目、コースがあって、講義とか演習とか実験とか実技とか、そういう形態で区分けしましたよね。今後、モードⅠとかモードⅡとかモードⅢとか、そういう参加の型で、区分する方式を採用してはどうでしょう。

A．単位の軽重のかねあいから言っても、妥当性があると信じます。

Q．私も正直にそう思った。内容によってできますね。

それと、私どもの大学は実はフレッシュマン・セミナーというのをやっていまして、1年生で入ったばかりのところを割と自由に、やや高校のクラス風で、20名で担任という先生が決まってやることになっているんですけど、それは非常によくやっておられる先生がいたり全然だめだったりするんですよ。1年生なもんですから、さっき先生は最初やるといいとおっしゃたんですが、フレッシュマン・セミナーというのを今みたいな参画型で組めないかなとお聞きしながらつくづく思いました。曲がり角にきているんですよ。うちの大学で、アイデアはよかったんですけど、二十何年前にそういうクラスを設けて、講義とか何か無関係に、私が担当したときは学園都市の見学を毎日毎日学生とやっていたんですけどね。それを何に使ってもいいという授業なんですよ。だけど逆に言うと縛りが少な過ぎて……。形式がないから、下手をするとダメになっちゃうかなという気がしないでもないんです。しかし工夫によっては参画型にできるなと思いましたね。ただし、まともにつき合ってくれる先生が何人ぐらいいるか。どちらかというとそっちにかかわってくる話ですね。

◆FDに学生も参画する方式を開拓する

A．開発の方向としては、FDの、ファカルティーというのを、構成員は先生だけじゃない、学部生もそうなんで、学部生の授業づくりの力をデベロップしていく方向が考えられませんか。学生の中にその力をつけていけば、先生のほうばかりに期待しすぎなくてもよい。

Q．そうですね。学生にその力がついてなかったなと思いますね。

A．私は学生側に大学づくりの技術と文化をどんどん蓄積していくという作戦をとる大学が出てきていいんじゃないか、それは長期戦では勝つんじゃないかと思うんです。

Q．いや、私ももう昔からそれを言っているんです。そうしないと勝てないですよ。大学院でもそうだし、研究活動でもそうだし、特に研究で大学院生がいないとこっちもお手上げの状態だから、そういうのはありますね。

A．そういう意味では大学院レベルのフレッシュマン・セミナーがこれから必要になってくるかもしれませんね。

Q．私たちは、学生が専門にきたときの3年生に、学科自身は都市計画というのが専門ですから、まずこの学園都市を題材にしたテーマを自分らで選ばせて、やるんですよ。そうするといろんなおもしろいテーマを学生はつくりましてね。

今まで1番印象に残っているのは、今でこそ大きな本屋があるんですけど、本屋がなくてみんな困っていたんですね。そのとき八重洲ブックセンター並みの本屋が学園都市にはできるかというのをテーマにして、研究所の図書予算まで全部はじきまして、自分らで本屋を構想してみた。そして、たばこは地元で買ってくださいというのと同じように、定期的に今の何分の1かずつ買ってもらえば、八重洲ブックセンター並みの規模の本屋が悠々経営できるというのが結論だったんですよ。

それから、つくばでオリンピックができるかというのがテーマだったこともあるんですよ。十分できるんですけどね。それとか、センター地区のある広場が全然、人がいつもいないんですよ。人がそこで楽しくやれるというのをプロジェクトにしました。周りの商店街を全部口説いて、天気のいい日曜日に全部そういうふうにシチュエーションを変えるんですね。楽しそうに、座席とかそういうのを変えた。そうしたら満杯になったという成果が出ました。

それから、公園が多くてトイレが余りにも汚いんで、学園都市のトイレを全部調べてどうしたらいいかというのをテーマにして、INAXとかああいうところまでヒアリングに行くんですね。彼らは彼らなりにいろんなプロジェクトを持っていて……。ですから、自由に東京まで取材にも行けるという時間を与えないと無理なんですけど、やりようによってはできます。参画授業は、そういうのに近いなという感じがすごくしました。ただ、私たちは先生のようにちゃんと枠組みをつくって反省しないんで、出来、不出来が余りにもね。やっぱりもうちょっと先生のようにこういうシステムを開発したり、もう少し計画的に取り組むべきだったなと、お聞きしながら思ってます。フィールドワークをやるような授業にはこういう方式を取り入れるとかね。全部じゃなくても、やりたい先生だけでも。

A．そうですね。やはり、計画的にやってみることですね。

Q．つい、勝手にやっているところがあってやり方が蓄積されないんだね。テーマで得られた成果は結構蓄積できるんだけど、やり方というのがどうも累積しない。

A．やり方は、でもそういうのを続けているとだんだんたまってきますよね。これまでは、先生個人にたまっていって、先生が替わっちゃうと違っちゃうんですよね。やはり学生の学びの文化として蓄えるシステムが必要ですね。